

入選

やさしさのバトン

群馬県 高瀬小学校

六年 窪田 琉良

東京にある父の生家には、今は誰もいない。月に一度、掃除に行く。重くきしむ雨戸を開け、窓を全開にする。家中が日の光と風で満たされ、息をふきかえす。大きく深呼吸をしたあと、仏だんに手をあわせ、祖父母にあいさつする。

窓から流れこむ風に乗って、仏だんの写真から、笑い声と「よく来たね」ってやさしい声が聞こえてきそう。僕はこの時間が好きだ。でもコロナウィルスが、あたりまえの日常を変えてしまった。今では父がときどき、家の様子を見に行く程度だ。

「A 子さんは元気かな。」

ふと、頭にうかんだ。A 子さんは祖母と仲がよく、道路向かいに住んでいる。ある寒い冬の朝、祖父が家の中で倒れているのを見つけてくれたのも、A 子さんだった。

きっかけは、いつもの時間に雨戸が開いていなかった。たったそれだけのことだったそう。その小さな異変は、生前の祖母と A 子さんがかわした小さな、そして不確かな約束があったから、A 子さんだけが気づけたのだ。そのことを知ったのは、祖父が亡くなってしばらくたってからのことだ。

祖母は病気になり、入退院を繰り返すようになった。自分もつらかっただろう。でも自分のことより、ひとりになってしまう祖父のことを心配したのだと思う。そういうやさしい人だった。だから、祖母はこっそりお願いしたのだ。A 子さんの家の窓から見える祖母の家の客間の雨戸を、ときどきのぞいてほしいと。

そして、祖父には何度も同じことを言い続けたのだ。毎日決まった時間に、雨戸を開け閉めするようにと。祖父に本当の意味を伝えていたかは、もう知ることはできない。でも、祖母が手渡したやさしさのバトンを、A 子さんはしっかりと受け取ってくれていた。

そのことに気づいたとき、僕が今まで見ていたのは、目の前の事実だけだったことがわかった。コロナウィルスで身につけた新しい生活様式は、僕に大切なことを教えてくれた。今は、祖父母と A 子さんにたくさんの「ありがとう」を伝えたい。

そして、いつまでも感謝の気持ちを忘れないようにしたい。もし、僕がだれかのやさしさのバトンを受け取ったなら、必ず次の誰かに届けよう。

いつか安心して会いに行ける日がきたら、仏だんにたくさんの花をかざって、「いつもありがとう」と言おう。そのあと、今度は僕のほうから A 子さんに会いに行き、今まで言えなかった言葉を伝えよう。

「ありがとうございます」って言ったら、きっと「何がよう」って笑うだろう。

そんなことを考えながら、僕は青い空を見上げた。夏の強い日差しと、遠くに見える真っ白な入道雲のせい、空がいつもよりまぶしく、いつもより青く見えた。